

Jodo no hibiki

浄土の響

天台聲明と天王寺舞樂



聲明・雅楽コンサート



伯耆の国、大山開山 1300 年祭を記念して復元された大山寺流引聲阿弥陀経による聲明と
天王寺楽所による雅楽・舞樂を公演いたします。

曲目 聲明：引聲阿弥陀経他 舞樂：抜頭、蘇利古、還城楽

2019年3月5日(火)

開場 17:30 開演 18:30

会場：東京文化会館 大ホール

出演：齊川 文泰 さいかわ ぶんたい 延暦寺学園叡山学院教授

てんのう じ がくそ
天王寺楽所

当日券：6,000 円（前売券：5,000 円）

主催：天台宗別格本山 角磐山 大山寺 聲明・雅楽コンサート実行委員会

協力：天台宗総本山 比叡山延暦寺

和宗総本山 四天王寺

後援：読売新聞 東京本社・読売旅行（株）

（株）読売・日本テレビ文化センター

制作：EXCITING JAPAN

【チケット・お問合せ】

読売・日本テレビ文化センター荻窪（午前 10 時～午後 8 時）

03-(3392)-8891



<https://gagaku.excitingjapan.jp/>

※都合によりスケジュールや内容が変更となる場合がございます。詳しくはホームページをご確認ください。



大山寺流引聲阿弥陀経の復元

伯耆の国、霊峰大山にある大山寺は、明治の廃仏希釈により多くのものを失いました。それは目に見えるものだけではなく古くから伝承されてきた独特な法儀にもおよびます。慈覚大師 円仁(794年～864年・第3代天台座主)によって大山寺に伝えられたと言う天台声明の秘曲「大山寺流引聲阿弥陀経」もその中に含まれます。天台声明は、棒読みの経文に高低・緩急などのゆるやかな曲節をつけ、音楽的な旋律によって唱えられる荘厳なお経です。三千院流・真如堂流(京都)と並ぶ大山寺流の阿弥陀経は口伝により伝承されていましたがいつの頃からか途絶えてしまいました。2018年、霊峰大山は開山1300年を迎え、古代には大神岳と呼ばれ神の宿る御山として信仰を集めてきました。御山を崇め守り続けた大山寺はその麓に位置します。栄枯盛衰1300年、大山への感謝の念を新たに、自然崇拝から生み出された歴史・文化的遺産を守り続ける事は、我々にとって大きな使命と考えます。そして、この大山寺に伝えられたと言う天台声明の秘曲「大山寺流引聲阿弥陀経」を復刻することが必須と考え、寺に残る古文書をもとに齊川教授に依頼し完成するに至りました。地元、米子での公演を終え、この度、皆さまからの厚いご要望と齊川教授ならびに天王寺楽所の全面的なご協力を賜り、「浄土の響 天台声明と天王寺舞楽」と題して、東京公演を特別開催いたします。

角磐山所傳 『引聲阿彌陀經』引聲作法常行三昧

叡山學院 齊川文泰 著

魚山声明の源流

洋の東西や文化程度、智識を論ずるまでもなく、音楽の歴史に必ず関係してくるのが儀式であり、その儀式進行に深く関わりを持つのが音楽です。現代において「声明」と言う呼称は、佛教に於ける伝統的な儀式音楽・聲樂・歌謡を指し、その起源は数千年前の古代インドの原始祈禱の表現法の一つと考えられています。佛教儀式に於いて、僧侶が佛陀(釋迦牟尼佛、ゴータマ・ブッダ)の説いた經典や、或はそれらを解説した文章を暗記し朗讀する際に旋律を附したのも、また歴代の祖師や先徳の徳を讀める詩や偈頌に節附けして唱うものでもあります。「声明」と言う単語は、佛教誕生以前からのインドのバラモン階級の必須教養の「五明」の一つであったことは巷間耳にする機会が多いですが、現代に傳わる佛教聲樂としての声明とはその内容がかなり廣範囲に考えられ、文學・文法・發聲學・音韻學の名稱である「シャブダ・ヴィドヤー(sabda-vidyā)」の音寫語に近い漢譯語・意譯語です。樂譜などの詳細は不明ですが、佛教誕生以前のインドの音楽集「ヴェーダ」が古代インドの讚頌歌頌を集めていることから、音楽・聲樂が存在したことは事實でしょう。中國に於いてはこれを「梵唄」と翻譯(漢語譯)しました。佛前において微妙な音聲で曲調を附し、偈頌等を誦誦吟詠して佛徳を讚嘆する聲樂で、今日の日本で言うところの「声明」はこの梵唄の系統です。(略)

● 出演者紹介

さいかわぶんたい

齊川文泰 延暦寺学園叡山學院教授

1953年(昭和28)兵庫県神戸市生れ

吉祥山實相寺・多聞寺・大乘院住職

1983年(昭和58)～比叡山高校1985年(昭和60)～叡山學院でそれぞれ「法儀声明」を担当、現在に至る。1989年よりポルトガル・フィンランド・ロシア・ドイツ・フランスなどで数十回の声明公演を行う。近年は「魚山流天台声明研究會」を率い、チェコのプラハ・グレゴリオ聖歌隊とのコラボレーション公演をヨーロッパ各国で催行。CD「通聲」(ソニーヨーロッパ)他がある。

てんのうじがくそ

天王寺樂所

「天王寺樂所」は、聖徳太子の時代にさかのぼる長い伝統を有し、内裏の大内樂所、奈良の南都樂所とともに三方樂所の一つとして日本の雅樂を伝承してきました。とりわけ、他の樂所と異なる独特の舞態を持つ天王寺舞樂は、平安時代から都の貴顕の注目するところとなり、吉田兼好も「徒然草」に「都に恥じず」と書き残しています。明治維新の際に三方樂所の樂師達は東京へ召されて、統合されて政府内に雅樂局(現在の宮内庁式部職樂部の前身)設置されました。この際、天王寺舞樂の伝統が危うく途絶えかけたものの、これを憂いた有志が「聖靈會」伝承グループとして明治17年に「雅亮會」を結成しました。明治23年には事務所を大阪木津の浄土真宗本願寺派寺院の願泉寺に設置し、明治26年には初代会長小野 樟蔭(願泉寺住職)のもと、会則を整えて天王寺舞樂の伝承団体としての地盤を確固たるものとししました。それ以来、民間雅樂演奏団体として、約130年にわたり連綿と天王寺舞樂の伝承・研鑽を続けてきました。近年に至り、会員数の増加と演奏技術の維持のために、雅亮會が組織改革を迫られていたところ、平成26年当時の雅亮會樂頭小野 功龍が天王寺舞樂協會から一任を受けて、文化財伝承事業に特化する団体「以和貴會」が結成されました。現在は、以和貴會が、天王寺舞樂協會の推薦に基づき、四天王寺から演奏時に「天王寺樂所」と名乗ることを認められ、「天王寺樂所(以和貴會)」として、既存の雅亮會と提携しつつ、天王寺舞樂を伝承しています。

天王寺樂所は、「聖靈會」などの四天王寺での伝統的な舞台に加えて、住吉大社、嚴島神社で定期的に奉納舞樂を行ない、一年に一回大阪のフェスティバルホール等での自主公演会を催しています。また、天王寺樂所は、アメリカ・カーネギーホール公演、ヨーロッパ各国、ニュージーランド、韓国、中国、チェコ(大統領臨席)など豊富な海外演奏経験も持っています。個人としては、初代雅亮會會長小野樟蔭は上方芸能人顕彰を受け、雅亮會樂頭であり初代以和貴會會長であった小野功龍は平成26年に日本藝術院恩賜賞・藝術院賞を受賞しています。天王寺樂所が伝承する「聖靈會の舞樂」(天王寺舞樂)は重要無形民俗文化財に指定されています。

●国指定重要無形民俗文化財「聖靈會の舞樂」(天王寺舞樂)保存団体：天王寺舞樂協會

「聖靈會」は聖徳太子の御忌にその聖靈をまつる法会で、4月22日天王寺区の四天王寺で執行される。この法会は王朝時代の舞樂法要の姿を伝えているもので、古式豊かな舞樂が六時堂前の石舞台上で四隅に巨大な赤紙花の曼珠沙華を飾って舞われる。総礼伽陀、四箇法會儀式に織り交じりながら、「振鉦」「蘇利古」「菩薩」「獅子」「迦陵頻」「胡蝶」などの舞樂が舞われる。四天王寺は、三方樂所の一つに数えられてきた由緒ある舞樂の伝承を持っており、明治初年に樂所の一つにして宮内庁樂部にした後、その伝統を伝え残して現在に至っている。

(文化庁ホームページ・国指定文化財等データベースより)



撮影：狹野 薫